# IC たより

公益社団法人　国際 IC 日本協会機関紙

一人ひとりのチェンジで信頼を築く

Initiatives of Change Japan

発行年月日　2016 年 3 月 13 日
発行所　公益社団法人　国際 IC 日本協会
〒 160-0004　東京都新宿区四谷 4-28-20
パレ・エテルネル　206 号
TEL：03-6273-1428　FAX：03-6273-1429
E-Mail：info@iofc.jp
HP：www.iofc.jp

頒価　1 部 100 円

19


◇目次◇
INDEX


スイス・コー国際会議 2015 報告
加藤光久さん報告・広島市長メッセージ・Mary Lean 氏記事・John Bord 氏スピーチ・矢野景子さん、豊田直子さん感想

第 12 回東北アジア青年フォーラム
長野清志さん

日韓ダイアローグ
中山啓介さん

APYC レポート
兼松恵さん

インドレポート
山田真輝さん

他

## 戦後 70 周年記念スイス・コー国際会議参加報告

加藤　光久

さる８月４日～９日スイス・コーで開催された "Seeds of Inspiration ( ひらめきの種まき ) " に参加。世界２０カ国から約１００名が参加。日本チームは、中島信子、松下真由美、田口ヤス子、角杉美恵子、武藤道子、光武仁美、加藤光久、加藤亮子）の８名。

会議の主要テーマである７つの行動基準を紹介したい。 ①静かな時間の励行、②正直な会話の励行、③自己の判断を捨て好奇心に変える、④正直、純潔、無私、愛を意思決定の基準とする、⑤他人、地球、自己を思いやる、⑥自分の声に従い、他人とともに実践する、⑦無知を創造力に変える。

全体会議では日本チームが活躍。会議 3 日目の 8 月 6 日、この日は、広島に原爆が投下された 70 年目に当たり、この日のプレナリーセションは、全て日本チームに割り当てられた。まず、ピアノによる音楽演奏の後、BBC 提供による、エノラ・ゲイの爆弾投下、上空 600 メートルで原爆が炸裂する瞬間の映像を 3 分間上映、参加者全員で、1 分間の黙とうを行った。引き続き、私が松井一寛広島市長からのメッセージを日本語で代読。この後、1950 年 MRA が広島・長崎両市長を含む日本代表団を初めてコーに招待した際のビデオ映像を 5 分間上映。

マウンティンハウスに到着した代表団をスイスの伝統衣装を着たたくさんの青年男女がとり囲み、日本語で歌を歌って迎する情景や、広島市長が原爆で生き残った楠で作った十字架を贈呈する情景が写し出された。この後、高校時代を広島で過ごした中島信子さんが、原爆で片足を亡くされた恩師の思い出を日本語で 2 分間語った。最後に、コー書籍部門の理事、アンドリュー スタリーブラスが広島市長への感謝の言葉を述べた。

ワークショップでは、長年木彫りの講師を務めている加藤亮子に、簡単な材料を持参して、彫らせることを提案、当初、彼女は、欧米人は日本人より手先が器用でないし、初心者が 2 時間の持ち時間では完成はとても無理だと乗り気ではなかった。10 名以内という募集制限にも関わらず、結局 15 名もの参加希望があった。ハロウィンのブローチが人気で、通常は 1 日限りのワークショップを 2 日間に延長。1 日目に彫ってから、2 日目に塗りをするという段取りにした。彫刻刀で指を切るのではないかと気が気でなかったが、とても器用に使いこなす人も。彫っている間、何も考えず楽しかったと、とても喜ばれた。

## コー大会に寄せて「広島市長のメッセージ」

2015 年 8 月

広島市長　松井　一實

スイス・コーにおいて、IC 国際会議「より良い世界のために－ 一人ひとりのチェンジのためのインスピレーションを求めて」が開催されるにあたり、被曝地広島から平和と友好のメッセージをお送りします。

1945 年 8 月 6 日、広島は、一発の原子爆弾により焦土と化し、その年のうちに幼子からお年寄りまで約 14 万人もの罪なき人々が亡くなりました。かろうじて生き残った人々の人生を一変し、被曝による心身の後遺症に終生にわたり苦しみ続けています。

本市と IC の前身である MRA、またコーとのつながりは、MRA が広島・長崎両市長を含む日本代表団をコーでも会議にご招待下さった 1950 年まで遡ります。それは被曝から 5 年、人々が被曝による後遺症に苦しみながらも焦土からの復興に懸命に取り組む中で、平和都市広島の進むべき道を確かなものにする大切な旅となりました。

会議に出席した、自身も被爆者である浜井信三元広島市長は、MRA ( 現 IC) の「私たち一人ひとりが良心の声を聴き、良い方向に変わり、家庭・職場・学校・地域社会・国、ひいては民族や国と国のあいだにも良い変化をもたらそう。」という理念に感銘を受け、1952 年 8 月 6 日の平和宣言で、「一人の心の中の愛情の火を点じ、二人の心の中にそれをうけつぎ、やがてそれが一つの世界への燃え続ける時、きっと世界は良心の環によって一つに結ばれるに違いない。」と世界に向け訴えました。

核兵器は、多くの尊い命を奪うだけでなく、人々から温かい家族の愛情や未来の夢を奪い、品性を大きく歪める「絶対悪」です。ヒロシマは、この「絶対悪」をこの世からなくすため、世界中の人々が、浜井元市長を始めとする被爆者の訴えを胸に刻み、国籍や人種、宗教などの違いを声、人と人とのつながりを大切に、未来志向の対泡ができる世界を築くよう努力されることを願っています。

私が会長を務める平和主張会議では、被曝者の思いを胸に、世界 160 カ国・地域の 6,700 を超える都市が力を合わせ、」国家や人種、宗教などの違いを超えて同じ人間として連携し、2020 年までの核兵器廃絶を目指し活動しています。

ヒロシマと同じ気持ちで世界平和を願い、本会議に参加されている皆様には、今後とも、「絶対悪」である核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現に向け、ともに力を尽くして行動していただくようにお願いいたします。

終わりに、本会議の御成功と御参集の皆様の御健勝、また IC の更なる御発展を心よりお祈り申し上げます。

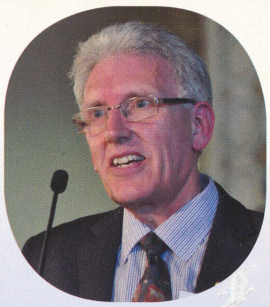
## 「戦後 70 周年記念日に想う－ 聞こえなかった声に今、耳を傾ける－」

IofC 英国　メリー・リーン

1955 年 15 歳の時父の転勤で広島に住むことになった中島信子さんは、戦後 10 年目の広島の様子を次のように回想している。当時街はいち早く復興していたが人々が原爆投下で受けた心身の傷は決して癒えていなかった。通っていた高校の恩師の一人、沼田鈴子先生は被爆で左脚を失われ毎日松葉づえを使って授業に就いて下さった。他の被爆者と同様に先生は当時社会から差別と偏見を受け苦しみと苦痛の中で何度も自殺を考えた。そんな中ある日、爆風と熱でとっくに枯れ果てたアオギリの木から新しい芽が吹き出ているのを見つけた先生は強く生きる勇気が湧き上がり、戦争の恐ろしさを後世の人々に伝えようとの使命感に芽生え、その後広島を訪れる修学旅行生に雨の日も風の日も毎日語り部となって語りかけた。更に他の被爆者たちと連携して国連など世界各国へ出向き、訪問先の人々と話し合ううちに、日本人は被害者であるだけでなく加害者でもあることに気づき驚いた。そして戦争を企画し実施した日本の軍国主義とその結果がどれ程悲惨で無意味なものであったか、二度と繰り返してはならないことを高校生たちに語り続けた。

2011 年に先生は亡くなられたが、それまで先生の話を聴いた生徒は 6 万人に及ぶといわれている。先生や被ばくで亡くなられた大勢の方たちの無念さを考えるとき、このことを後世の人々に伝えることは、幼いながらも戦争の時生まれていた自分たちの世代の使命であると痛感する、と中島さんは云う。 広島の原爆慰霊碑には、「安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませぬから」と刻まれているが、ここに「誰が」という主語がないのは全人類を指しているからだ、と中島さんは指摘する。 オーストラリアから会議に参加したジョン・ボンド氏は「慰霊碑に刻まれたこれらの言葉を選んだことで日本人はその後の世界平和に大きく貢献した」と語った。また、同氏は「IC の理念に心を動かされたオーストラリア人と日本人は世界第二次大戦後の両国の新しい関係構築に大きな役割を果たした」とも云った。

## 謙虚なステーツマンシップの実例



**ジョン・ボンド（イギリス在住）**

誰でも平和を望んでいる。しかし、しばしばプライドがあるがゆえに効果的な平和の創造者になれない時がある。広島の慰霊碑には「われわれは同じ過ちを繰り返しませぬから」と記されてる。この「われわれ」は全人類をさしているのだが、日本人が選んだ文言としてこれらの言葉を選んだ人びとは国のプライドを乗り越えようと努力をしたに違いない。しかし、そうすることで彼らは平和に大きな貢献をした。

プライドを乗り越えることへの決意はその後も、日本で、そしてかつての敵国の間でもずっと続いた。ここで一つのストーリーを紹介したい。

世界第二次大戦後、オーストラリア議会にキム・ビーズリーという若い国会議員がいた。他のオーストラリア人と同様に彼は日本に不信を抱いていた。「日本に対する甘い政策で我々は裏切られた」「日本は罰を受けるべきだ」と彼は国会で発言した。それから彼は Caux へ行った。そこで彼はいかに自分のプライドが自分の判断の邪魔をしていたかということを悟った。

それから数年後当時の岸信介首相がオーストラリアを訪問した。オーストラリア人は岸の訪問を苦々しく思っていた。キム・ビーズリーは国会で語ることを決意して「1920 年代のオーストラリアを含む欧日貿易協定は日本にとって不利なものであり日本人の生活水準を低下させるものだった」と指摘した。この言葉によって日本の自由党政府は国民の不信を買い、遂に 1931 年軍部が実権を握った。その悲劇的結末は今日われわれの知るところである。ビーズリーはこう言った。「もし、他国の国民の生きる権利を否定すれば、それは戦争行為そのものだ。何故なら、力によって問題を解決しようという政治的な動きをその国に作らせてしまうからだ」

オーストラリア人の中には自国の誤りを指摘するビーズリーを非難し、悪いのは日本が戦争をしたことだ、と言う人もいた。また他の人たちは、彼のスピーチとそれがもたらした新しい考えを歓迎した。

過去に Caux を訪れたことのある日本の指導者もまた、働きかけていた。岸が日本を出発する前、社会党の加藤シヅエ参議院議員は岸を訪問していた。加藤議員は戦時下の政権を強く非難し、こう言っていた。「もし岸が戦争によって与えてしまった他国民への苦しみに対し、日本国民を代表して謝罪するなら、野党として政府を応援しよう」と。岸はその忠告に留意して自分のスピーチの内容を変えることにした。

オーストラリア国民は岸のスピーチに感動した。シドニー・モーニング・ヘラルド紙は「我々は苦しい過去の後に贅沢な生活をする気はない。岸氏の初めての訪問は決して心地よい経験ではなかったかもしれない。しかし、日本の犯した罪に対してこれ以上誰も公式の償いを求めることは出来なかった」と社説で書いている。この時以来、両国の間に新しい信頼関係が出来上がった。

[redacted]（John Bond）は自分の間違いを認めることがどれ程難しいことか知っている。先月、私はここ Caux で会議の責任者だった。大変良い会議だったが、私は間違いをしてしまい主催者側の何人かの人を傷つけてしまった。手紙を書くことは辛いことだったが私は書いて謝った。自分の過ちに正直に気づくことは、相手を傷つけたことを癒す必要な第一歩だということを学んだ。

オーストラリアでは過去 200 年以上アボリジニー（先住民）が冷酷な扱いを受けてきた。私は同国の「国民謝罪の日委員会」（National Sorry Day）の事務局長を務めていた。そこでは、新たな関係構築のスタートとして謝罪することを勧めている。今では多くの政治家は態度を変え、議会全体が謝罪を支持している。首相はこれに真っ向から反対した。しかし多くの人が参加する中、同国先住民と白人オーストラリア人の間の癒しに向けた関係構築に 10 年かけて努力した。10 年後新しい首相が選出されたが、彼の議会の最初の仕事はこの謝罪をすることだった。多くの政治家も態度を変えたので議会全体が謝罪を支持した。2008 年は全オーストラリア人にとって興奮の瞬間だった。私のアボリジニーの多くの友人は生まれて初めてオーストラリア人であること、この国で思う存分活動できる機会を得る喜びを感じていた。

ですから、私は、日本の指導者たちが戦後 70 年という長い年月を経た今プライドを克服して、戦争を振り返る機会を持ったこと、太平洋を挟んだ両国が平和へ向けての大きなビジョンを見つけるための行動を取ったことに深い喜びを感じているのです。

## Caux CATS に参加して

**矢野　景子**

２０１５年の夏、２年続けてＣＡＴＳプログラムに参加しました。今回のテーマは、「子供と大人との変革への協同参加 Partnership」でした。前年は東アジアからの参加が、長女の直子と孫の寛と私の３人だけでしたので、少々及ばずながらも東アジア代表と気を張っておりました。お陰様で、ＣＡＴＳのホームページに孫と写真が掲載され、それをきっかけに話しかけて下さる方もありました。今回は私の友人の関淳子さんとタイ在住のお嬢さんの純子さん、お孫さんのロマさん、またフランスに駐在しておられる大沢さんご夫妻と２歳の杏ちゃん、途中から石田寛さんと高校生のお嬢さんも参加して下さり、多勢の参加者たちと積極的に交流して下さいました。

食事やお茶の時間に２７０名もの全ての方々とお話しすることは適いませんが、ご縁のあった方々と同席したり、ご挨拶したりする空間と時間を共有できることは貴重な体験でした。この会議を通じて、ほんの小さな一歩であれ大人も子供も参加者全員が、より平和でより豊かな生活ができる世界の構築へ、今後少しでもお役に立てることを確信しました。

先進国と途上国との相違は明白で、５０年後の未来の希望を書き出した表を共同で作り上げましたが、インドやナイジェリア、ガーナ、ペルーなどからの子供の夢は、全ての子供たちが男女を問わず、教育を受けられるような社会でありたいということでした。一方、先進国の子供たちでは、宇宙へ行きたいという願いもありました。実際多くの国では子供たちが家族の働き手となっていますし、インドの農村から来た１０歳の女の子が、１２歳では結婚したくないと話してくれたのには驚きました。

多様性を認める世界をＩＣ協会は目指しています。孫の参加した劇のワークショップのテーマも、Ｃａｕｘ城を攻撃しに来たお化けたちと子供たちが仲良くなるというものでした。地理的にスイスのＣａｕｘは日本から遠い所です。いつの日か日本で、日中韓や東南アジアの国々の親子連れが集い、ゲームや劇、踊り。折り紙や図工などを共にすることで交流を深め、ブックマン博士が提唱されたＩＣの精神が自然に身につくワークショップを開けたらと願いました。

**豊田　直子**

今夏も、CATS（Children as Actors for Transforming Society）に参加するため、母、息子（小４）と３人で Coux を訪ねました。今年は日本人が倍増。非常に頼りになり、大変心強く感じました。息子の参加した６～１０歳のプログラムでは、そこからどう行動に移せばよいか考えました。また人に求めるだけでなく自分自身はどういう性格なのかを知る機会もあり、内面を見つめました。ワークショップでは、真面目に話し合うこともありますが、共同作業を通して遊びの中から実感として体得していけたように感じます。息子は今年も英語は話せないものの、同年代の子とよく遊び、たまにいざこざもあり、揉まれつつも楽しく過ごしていました。どのように意思疎通を図っていたか聞くと「"OK""NO""My name is Hiroshi" だけで大丈夫。あとは身振り手振りで通じるよ」とのこと。最終日の TOGETHER TIME(Presentations&interactive experiences) では、Japanese ORIGAMI コーナーを設けました。とても大盛況で、息子も「沢山の人が来てくれて嬉しかった。来年はもうちょっとわかりやすく説明したい」そうで、さすが英語は喋れた方が良いと感じているようです。これも今年参加下さった関 Family の多大な協力のお蔭です。それだけでなく途中から石田寛さん親子、パリから参加した大澤 Family も加わり賑やかな Coux 滞在となりました。数は力になることを実感しました。最後に息子から一言「来年は日本語通訳が欲しい！」母親がべったりの通訳はもう嫌な様子。CATS に日本語通訳がつくのと、息子が英語を習得 するのとどちらが早いでしょうか？感謝。

CATS CHILDREN AS ACTORS FOR TRANFORMING SOCIETY

## 第 12 回東北アジア（日中韓）青年フォーラム開催

長野　清志

8 月 23 日から 24 日まで開催された日韓の学生のダイアローグに引き続き、8 月 24 日から 29 日まで、韓国政府の支援と韓国 MRA/IC の主催により「東北アジアの発展のための平和と協力」のテーマの下に、第 12 回東北アジア（日中韓）青年フォーラムが開催されました。今回は MERS の影響を受け日本からの参加者は定員を下回ってしまいましたが、韓国に交換留学中の大学生 4 名を含む、9 大学からの 10 名、又、12 歳まで中国で過ごした高校 3 年生の山口琳令さんの特別参加、更には日本で学ぶ中国からの留学生 1 名という総勢 12 名が日本チームとして参加しました。又、弊協会の高橋衛副会長他 2 名の理事も参加しました。中国からは、韓国や日本へ留学中の学生を含めた 26 名が、そしてホスト国韓国からは、40 名余りが参加しました。昼間のディスカッションに加え、夜遅くからの自主的なミーティングでも歴史問題を始め、お互いに考えていたこと、感じていたことを率直に話し合い、参加者同士に深い友情が築かれました。又、独立記念館や国立博物館等への訪問に加え、北朝鮮との非武装地帯にある板門店の第三トンネルの見学が予定されていましたが、韓国と北朝鮮の緊迫した状況下、その訪問が中止となるなど、現在、韓国の置かれた厳しい政治状況にも直面しました。日本の参加者の感想を一部紹介します。

## “ 日中韓の将来を共に良くしたい ” という共通の願い

漢陽大学 4 年　小田　世秀亜

私は日本人の父親と韓国人の母親を持つ日韓ハーフとして、昔から日韓の関係について考えることはあった。現在はソウルで漢陽大学に留学し、留学をスタートさせた時からはより深く考えるようにもなった。留学生活を通してたくさんの中国人の友達とも仲良くなり、私個人としては韓国や中国を理解していると思っていた。私が漢陽大学で知り合った友人と日韓の問題について話し合うことも多々あり、正直今回のフォーラムは私にとってさほど特別な経験にならないのではないか、と思っていた。しかしこのフォーラムはそんな私にとっても大変有意義で忘れられない経験となった。・・・。メインの日程には様々な形式・主題の討論が含まれていて、終始大変良い雰囲気の中で意義深い意見交換をすることが出来たと思う。しかし最も心に残っているのはそのメインの日程の前後に楽しんだ交流であった。討論の時間の外で、日中韓それぞれのメンバーと遊んだり、少しのお酒を楽しんだりしながら、驚くほど速く仲を深めることが出来た。これはこのフォーラムが一週間というある程度の長い期間と、参加者全員に “ 日中韓の将来を共に良くしたい ” という同じ願いがあったからだと思う。留学している学校の友達と仲良くなる時とは、ここが決定的に違っていると思った。学校で会う友人は、特に日本に対して悪い感情は持っていなくとも、共に日中韓の将来を良くしたいという願いまでは持っていない人がほとんどだからだ。私は今回ソウル在住日本人留学生として日本チームに入ったが、韓国語が出来る日本人として他の日本人参加者よりも一層韓国人チームと仲良くなれた気がする。・・・。やはり交流において大きなポイントとなるのは言語であると再認識させられた。卒業・就活の後に少しでも余裕が出来たら、中国語も学んでみたいと思う。

フォーラム全体を通して、これからずっと仲良くしていきたいと思えるたくさんの仲間に出会えたことが本当にかけがえのない収穫であった。最後の共同宣言文に願いを込めて終わったが、いつかその願いが叶う日が来ると信じているし、その願いを我々の努力をもって叶えていかなければならないと思う。私は少しでもその力になれるようなフィールドで、社会人として働いていきたい。

## 生涯の友人ができたフォーラム

慶応義塾大学総合政策学部２年　〆田　祐奈

国立博物館見学の際には、韓国の学生が私達日本人学生に対して、韓国の歴史をわかりやすく教えてくれ、逆に私達は日本の歴史を教え、お互いがお互いに学びを深める機会を持つことができた。最初は日中韓の間にはさまざまな歴史問題が存在するため、一緒に博物館を見て回るのは大丈夫だろうかと心配をしていたが、そんな心配は一切必要なかったように思われる。お互いがお互いに教えようとする心を持ち、知ろうとする心を持つことが大切なのではないかと感じた。

私がこのフォーラムに応募したきっかけである「韓国や中国に生涯の友人ができるはず」という言葉。まさに私はその言葉通りに生涯付き合いたいと思える友人ができた。彼女とはいつどうしてどのように親しくなったのかお互いに明確には覚えていないが、本当に親しくなるということはいつの間にか自分たちも知らない間に親しくなっているということだと思う。フォーラム期間中にも一緒にごはんを食べたり、夜まで部屋で話をしたり、そんな些細な時間でさえも大切に思えた。わたしが日本に帰国した今でもお互いに連絡を取り合っている。

私が１週間過ごした中で一番印象に残っている言葉がある。「今まで自分の国にしか興味がなかったけど、あなたに出会って日本に興味を持った。日本に行ってみたいと思った」「あなたと仲良くなってもっと仲良くなりたい、もっと日本を知りたいと思うから日本語教室に通おうと思う」このような言葉だ。私はこの言葉を聞いた時、心から嬉しかった。また、自分が日本を背負う日本人として、相手にこのような影響を与えることができたことは複雑な日中韓関係を持つ３カ国に対して貢献することができたのではないかと考える。

## ～明るい未来に向けて～

首都大学東京３年　日比谷　佳乃

私は現在韓国に留学しているが、留学中に必ず日中韓３ケ国で集まり、歴史問題を含めて未来を考える真剣な討論をしたかった。その目的を叶えたものがこのフォーラムであった。・・・。このフォーラムは今まで私が参加したものとは明らかに違った出会いであった。どんな国際交流プログラムよりも質が高く、また出会いだけでは終わらない大切なものを得た。それは「東北アジアの未来を考える日中韓の青年に出会えた」こと。この１週間、参加した１人１人が真剣に東北アジアの未来を考え、何も隠さず、腹を割って討論した。感情的になり、涙を流す人もいたが、みんなそれだけ真剣だった。特に NIGHT MEETING は任意ではありながら、日中韓どの国も多くの参加者がいた。そこでは普段は聞くことが出来ないようなシビアな政治問題に触れた討論をした。「お互いの国の印象」、「アメリカの存在」、「慰安婦」、「竹島（独島）は韓国のものと言うだけで反日感情なのか」、「各国で受けた不快な出来事」、「北朝鮮と中国の関係」。

国が違えば、受けてきた教育はもちろんのこと、流れるニュースも異なる。竹島（独島）の領土問題を例にとると、ある韓国の女の子がこんなことを言っていた。「韓国人みな独島は韓国のものと思っている。だからといって、これを反日感情ととらえるのはおかしい。私はどんな韓国人相手にも日本が大好きと自信を持って言える」と。

私も彼女と同じようにどんな人に対しても、韓国も中国も大好きと自信を持って言える。確かに、国家間の問題は山積みだけど、このフォーラムを通して、私には確かな東北アジアの明るい未来が見えた。

## 韓国訪問を通して考えたこと

中山　啓介

私はこの夏の８月23日・24日、「韓国 MRA/IC」からの呼びかけに応じて開かれた「日韓ダイアローグ」という催しに出席するため韓国を訪問した。以前に一度韓国を訪問したことはあるが、実質的には初訪問に近い。訪問目的は、「日韓両国の和解と協力を通しての関係改善」というまことに重いものであった。

特に今年は日韓国交正常化50周年を記念し、両国の大学生達が近年の歴史だけではなく、朝鮮通信使のような歴史的事実をも繙きながら未来志向的な協力関係を構築することが謳われた。このダイアローグを通し、また発表会に於けるフロアとの対話を通じて産み出されたものは、両国の関係改善と東北アジアの平和に寄与しよう、という両国の青年達の高い理想と堅い決意を伴いつつ、かつまたシニアの人達をも巻き込んだ明るく勇んだ雰囲気のものであった。

今回日本からは、国際 IC 日本協会の高橋衛副会長はじめ理事・会員10名が参加し、それに IC 国会議員連盟のメンバーである白真勲議員が特別参加した。韓国側は、MRA/IC 韓国本部の車光善総裁や国会議員連帯の李柱榮氏（セヌリ党議員でセウォル号沈没事故の後始末で陣頭指揮を執った前海運水産相）らをはじめ理事並びに委員の方々13名が参加した。我々は約３時間半胸襟を開いて体験を語り合った。50年近く前の青年時代の体験をはじめ、最近 MRA/IC の思想に触れて体験した道徳的覚醒のことや家庭内での人間関係の変化の体験等を語り合う中で、お互いに急速に硬さが融け、両者の距離が縮まったことが実感できた。

韓国 MRA/IC メンバーである国会議員からは、戦後ドイツとフランスが和解できたように、今日の韓日両国間での信頼を築くための打開策を、両国それぞれの指導者らにも、さらなる働きかけが、いまこそ望まれている。との声が上がった。

その後の食事会ではさらにその信頼関係は膨らみ、その後の一連の会議や翌日の国会議長訪問でもその喜びはさらに続いた。日韓は最も近い隣国同士であり、新たな50年の第一歩がこのような形で確実に形成され、その場に居合わすことが出来たのは、個人的にも大きな喜びであった。また、それは次世代に託す新たな希望となりうるものであった。

繰り返しになるが、今年は日韓国交回復50年の節目の年でもあり、「千里の道も一歩から」の譬えの如く、「民間の我々に出来る事ことが何かあるのではないか」「民間の我々だからこそ出来る何かが案外身近なところに眠っているのではないのか」と考え、参加を決意したわけであるが、今回の実体験を通してそれを確信できたのは大きな収穫であった。

## APYC 2015 カンボジア・シアヌークビルに アジア・太平洋地域の青年ら、14 カ国から 70 名の参加者が集う　8月1日～8日

兼松　惠

今日の青年たちこそが、より良い社会を世界で築いていくものだと信じ、「一人ひとりの自分の在り方について、正直に見つめ直し、自分の家族、友人ら、学校、職場を通して、自分が置かれている人間関係から、社会状況をより良い場所に変えていくために、自分は何ができるのかを考え、行動するようになってほしい」という世界各国の IofC の方々の思いから、多くのアジア・太平洋地域の青年たちが参加できるために寄付を寄せられての開催となりました。日本からも、早稲田大学の前田梓さん、愛媛大学の徳増萌萌さん、国際 IC 日本協会事務局から兼松が参加いたしました。

**チェム・トニン (IofC カンボジア会長 ) さんの開会挨拶：**『人生は、沢山の思いがけない出来事で一杯です。IofC に出逢ってからというもの、私の両親、そして兄弟との関係も改善することができました。カンボジアの青年たちは 何か社会のために尽くしたいと思いを心に抱いています。が、何をどうしたら良いのかわからないことが多々あります。IofC カンボジア協会は こういった青年たちと一緒になって、4 つの絶対道義標準に沿って、自分たちがいま、社会で困難な環境に置かれている人々のために何ができるのか、静かな時間をもち、学び合っています。この APYC を通して、自分のことだけで精一杯というような生き方を超えて、課題を抱えている世界の現状に、希望を与えられるような、より良い家族関係のため に、そしてより良い社会、国のあり方のために 自分は何ができるのかを一緒に学び合う機会となりますように願っています !』と述べました。

**ソン スベール閣下：**カンボジア国王最高顧問による開会の辞では、IofC の長年にわたる友人として、ご自身の若い時に IofC との出逢いから、インドの青年から、自分のそれまでの容易な生き方であったことにチャレンジをうけたこと、自分自身に誠実であること、謙虚であると同時に、怖れずに強い心であることを学ぶことができたことに触れ、一人ひとりが次世代の将来のために何ができるのか、希望をもって考え、行動に移して欲しいと、APYC 参加者に励ましの言葉を贈りました。

会議では、毎日各ファミリーグループで、それぞれのライフストーリを、信頼をもって分かち合い、互いの理解を深めました。ファミリーワークショップを始め、信頼構築への道、音楽、女性と平和といった各ワークショップにそれぞれが参加。フアミリーワークショップでは、親との関係を見直すときに、親自身もどんな家族環境で育ってきたか、家族の歴史から、親の視点を理解しようとしたときに、家族への愛と理解が深められることの認識を深めました。音楽のワークショップによる各国からのコーラスも発表され、夜に開かれたバザーでは、各国の作品が紹介され、各国から APYC 参加費用の一部の募金となり、ミャンマーのミャット・モンさんは、ミャンマーからの作品の売り上げをミャンマーの洪水の犠牲者のための支援としました。

**徳増萌々さん 愛媛大学 2 年：**APYC に参加して、私の勉強に取り組む意識が変わった。この会議に参加するきっかけとなったのは知人からの紹介で、会議参加が決まった当初は、英語を実践的に使えるいい機会だし、アジアに友達が沢山できたらいいなというくらいの軽い気持ちだった。しかし、プログラムに組まれている様々な課題について、みんなで取り組んでいく中で、私は自分がアジアについて、自国である日本について 全く知識がないということを思い知らされた。参加者は私より年下の子もいれば、年配の方もいたが、皆がそれぞれよく自分の国が抱える問題や他国との関係性についてよく勉強しているという印象を受けた。中には、将来「女性差別問題と闘うための機関を立ち上げたい」や「環境保護のシステム改革をしたい」などという強い意志を持った参加者たちにも出会い、自分への良い刺激となった。私は始め、自分が他国の参加者と英語でうまくコミュニケーションをとれないことにひどく落ち込んだが、それ以上に「アジアの問題について何も知らない・自己の意見すらも持てない」ということに恥じらいを感じた。そして現在は、世界・日本で起こっている問題に対し当事者意識を持とう、まずは知ることから始めようと、日々勉強に励んでいる。私は小さいころから海外で活躍したいという思いがあり、大学でも「国際理解教育コース」を専攻しているが、本当に互いの国のことについて理解しあい、いい関係を築き上げていくためには、英語習得だけでは不可能だということを身に染みて感じた 12 日間だった。この会議の中で、私が最も好きだった時間は「QUIET TIME」だ。黙想をし、音のない状況で、自分で考え、ノートに書きだすという作業。私は忙しい環境の中で育ってきたせいか、静かに物事を考えるという時間をあまりとったことがなかった。しかし、この作業の回数を重ねていくうちに、自分の頭の中が整理しやすくなったことに気がついた。またそれを仲間にシェアすることで、これまで悩みを抱えていた家族との関係、常に自分と他人を比較し劣等感を抱いてしまう自分自身の問題と、しっかり向き合えたと思う。実際、帰国してからの家族との関係は改善されたように思う。それだけをとっても、この会議に参加して本当に良かった。 私は英語が流暢に話せるわけでもなく、コミュニケーションをとるのがやっとくらいだったが、みんな私の話に真剣に耳を傾けてくれた。カンボジアで過ごしたこの貴重な 12 日間を、私は一生忘れない。そして、来年インドネシアで行われる IofC 主催の会議に向けて、自分の英語コミュニケーションスキルの向上をはかりたいと思う。

**前田梓さん早稲田大学 3 年：**絶対正直についての全体会議で、インドで数ヶ月間 IofC の研修を受けていた時のことで、父親のポケットから、だまって 小遣い銭として使っていたことについて、父親に思い切って、正直に自分のことを手紙に書いたことから、「娘のことを心配していたけれど、正直に打ち明けられるまでに、成長していてくれたことが嬉しい。」とお父さんの返事があり、心が解放されたことについて分かち合いました。また、以前に学校で友達をいじめていたことへの謝罪の気持ちを、APYC の仲間に話していたら、カンボジアの参加者で、いじめにあって、登校拒否をしていた人が、梓さんの気持ちに癒され、「また、学校に行く勇気をもらった。」と決意してくれたこと。『自分の気づきをシェアし、実践することで、まわりの人の新たしい出発点にもなる』ことの経験を分かち合い、誰もが、新しい一歩をはじめることができる！と、会場の みんなを勇気づけた。

**カンボジアのチュム・ブッグさん：**貧しい家庭の出身であり、彼の父親と 12 人の兄弟のうち 5 人の兄弟を戦争で亡くしたことを話した。彼の 家庭環境からソン スベール閣下が運営していた「平和な子供たちの家」の孤児院に住むことができ、またタイで学費が最も高いとされている大学に留学できるためにソン スベール氏が、学費の支援をしてくれました。とても辛い時期でもあった。自分の肌が兄弟よりも黒かったことから、みんなに君はゴミ缶から拾われてきた子供だ。と言われ続けて来た。大学を卒業して、幾つかの給料の良い NGO の仕事もしていた。が、彼を小さい時からソン・スベール氏から受けたてきた支援に、恩返しをしたいと決め、ソン・スベール氏が立ち上げた孤児院を支える「公正、平和と発展のためのクメール基金」のために、わずかな給料で働いている。自分の家族からは「そこまでするの ..」とまで呆れられたが、社会に対して自分がすべきことだと信じて実践しています。IofC は自分探しです。真の自分に従って生きなければ、人生は混乱そのものだ。自分より恵まれていない人々に手をさしのべることは、自分には道義的責任があります。完全な人間ではないが、社会の良いことのために尽くそうと努めています。今日、私は幸せに思います。誰もが、幸せを感じることが必要です。」

**インドネシアのフダさん：**「過去から癒し、平和構築への道」と題したセッションでは、2004 年に仏教国であるカンボジアで開催された APYC に参加した時、宗教上、食べられない食事が与えられた時の経験を話した。その経験があって、自国の少数派の人々への理解を深めようと考えた。主にヒンズー 教の人々が暮らしているバリを訪ねた。世界中から来ていた人々と同席していたときに、バリでの爆発事件について、どう考えているのかと尋ねられた。「他のイスラム教徒が多くの人々を殺めたことについて、申し訳ないと思う。自分にとってはイスラム教というのは平和を重んじる宗教で、あなたとも平和でいたい。世界ではイスラム教に対しての沢山の恐れがある。私には社会に平和をもたらすという大きな課題を抱えている。」

**インドのマユ シャーさん：**自分たちとは異なる宗教の信仰をもつ、弟の嫁を受け入れることの難しさについて話しました。彼女が弟の宗教を変えようとしたときには、彼女にたいして憎しみを覚えたほどでした。インドの IofC の会合に集っていたときに、弟の嫁に謝罪の手紙を書こうと決めました。カンボジアに来る前に、この義理の妹とその家族が訪ねてきました。そのとき彼女は マユさんの手をとり、口づけをしました。7 年間という長い間、難しい間柄でしたが、その難しさも終焉となりました。得てして宗教が人間形成に大きな影響を与えます。私たちは怒り、不快感、恐れ、喜びといった多くの感情を抱きます。これらの感情が私たちの言動をあらわにしてしまいます。私は喜びによって導かれる自分であるべきだと切に思います。

**フィリピンのエド・エスピリトさん：**いつも父親に謝りたいと思っていました。ある日、父親に謝罪の手紙を書きましたが投函できずにいました。友達がその手紙を投函したのです。2 週間後、母から父が危篤だと知らせてきました。神に , 父に会って謝るために二日間だけ下さいと祈りました。神は 2 ヶ月間与えてくれました。その間、裕福な暮らしから貧乏のどん底に突き落とされたとき、父が私たち家族を養うために、どう生きてきたのかを理解しました。父は息子を誇りにしていると語り、息子はいいやつだと信じていると語ってくれました。本当の自分になることを止めている、自分の心の怒りや憎しみから、自分を解き放すことを決めたら、全く新しい人生を始めることは可能になる。いつも難しいことだけど、心静めて、心の奥の声に耳を傾け、聴き従うことで助けられる。自分は心の奥の声を聴いて、書き留めてきたノートを 40 年間持ち続けてきた。静かな時間をもつことで、失敗したことはなかった。

**チャイ・ソティラ ( カンボジア ) さん：**幸福な家族の一員であったのが、家族の奴隷にでもなったような経験を話しました。17 才のときに病気 になり、病院に連れてって欲しいと姉に頼みました。姉は治療代がかかることを苦に、連れていってくれなかったのです。一人で病院に行った ところ、もし病院に来ていなかったら後 2,3 時間の内に命を落としていたと言われました。姉に対して憎しみさえお覚えましたが、2010 年の APYC に参加して、姉がお金に困っていた時だったかもしれないし、助けたくとも病院に一緒に時間がなかったのかもしれないと思い、助けて くれなかったことを許すと姉に手紙を書きました。「まだ完璧な関係ではないけれど、姉が私にしたことに理解したようでした。勇気と時間を かけて、お互いに良い関係になろうと努めています。」

今回の APYC を評価するミーティングでは、それぞれの参加者にとって多くの学びがあり、それぞれの気づきによる成長があり、それぞれ今の自分が変わること、自分のまわりの環境のチェンジのために自分ができること、自分が暮らしている環境のなかで何をするべきか、熱い思い とともにそれぞれが APYC を後にしました。 いくつかのコメント：これまで発言する勇気がなかった。今回、みんなと話し、分かち合う勇気が出た。家族に言葉で自分の気持ちを伝える勇気をもらった。カンボジアに来て沢山のチャレンジを受けた。人々の心の優しさと優さ。誰もが、多くの恵みを両親から受けている。自国が変わることを切望している。裁くことなく聴く耳を傾けよう。メッセージを音楽で発信していく。それぞれがきちんと相手の思いを聴き、受け止め、評価される環境こそが、最高の環境であることを認識した。会場からプノンペンにもどり、海外からの参加者はホームステイをする機会があり、別れはいつも辛いものだが、一緒に学んだことを自分自身、家族、社会のために、実践する新しい道が待っています。2016 年の夏、インドネシアで開催予定の APYC の準備が始まっ ています。

追記：2016 年 8 月 6 ～ 13 日　Java 島 Bandung-West にて開催決定（参加申込期限は 4 月 30 日　詳細は事務局まで）

## ICのオープンさと影響力を実感した１ヶ月
## 第２回レポート　インドＩＣセンターでのインターン生として

慶應義塾大学３年　山田　真輝

インドにきて２ヶ月が経ちました。英語にも慣れ、IC 会議でのセッションの設計や、ファシリテーション、そして Grampari (IC India が運営する農村環境センター ) のプロジェクトにも関わり始めることができています。

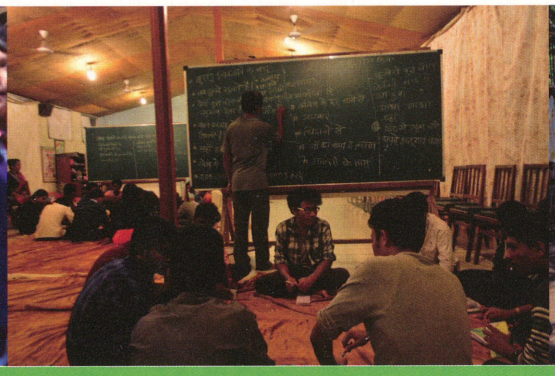
さて、今回はこの１ヶ月の間で携わった２つのプロジェクトについてお話します。

１つ目は、Grampari による、周辺の村に住む中学生男児 20 人を対象にした２週間の泊まり込みプログラムです。このプログラムは、IC の理念をベースにした職業訓練とリーダー育成を目的にしており、農業実習や携帯電話の修理、また村のコミュニティーにおけるリーダーシップを学びます。今回は、リーダーシップ育成の一環として２つのセッションをインターンチームで設計して実施しました。１つは、"River of Life"（人生を川に例えて描くワークショップ。人生の客観的な理解とチームビルディングが目的です）。そして、"Inner Peace Building"（「心の平和、家族の平和、コミュニティーの平和、国の平和、そして世界の平和」の関連性を解きながらどう平和構築に「個」として貢献できるかを考えるワークショップ）。いずれも、セッションのデザインとファシリテーションを学びたかった私にとって、このプロジェクトに関わることができたのには大きな意味があり、たくさんの収穫と反省（伸びしろ）を得ることができました。またその後も複数のグループに対してこのセッションを提供するに至っています。

２つ目は、10 月 15 日の World Hand Wash Day に合わせて、村の小学校低学年の児童ら 200 人ほどと "石鹸で手を洗おう！" というスローガンを掲げて街をマーチングする社会変革運動です。今回はインターンチームとして Grampari チームとともに学校を訪問し、子供たちとデモを行いその後の手洗いのセッションを手伝いました。手で食事をする文化のあるインドでは、手を洗わずに食事をすることによって命を落とす子供が多く存在します。WHO（2010）の調査によるとインド国内において１日平均約 1,000 人の幼児が下痢 / 嘔吐 / 呼吸困難によって命を落とし、そのうちの 47% は石鹸で手を洗うことによって防げるとしています。

そのため Grampari はこの運動を計 66 の学校、延べ 5800 人に訴えてきました。プログラム内では、デモのほかに、手洗いの方法（『手洗いの歌』を歌いながら）を教え、tipitap と呼ばれる簡略型手洗い装置の作り方伝授および設置、校内で石鹸を購入するクリエイティブな仕組み（生徒の誕生日にチョコレートの代わりに石鹸をプレゼントする等）等を共に考えています。その結果、学校内で石鹸を使い手を洗う児童の割合が 5%からプログラム開始１年後には平均で 70% まで上がっています。また学校で子供の手洗いが習慣化することにより、子供から家族へ、家族から社会へ波及するインパクトもあると考えられます。

この１ヶ月間に IC センターは、インド政府の官僚から、ビジネスパーソン、インドトップクラスの大学の学生など様々な層の人達に対してプログラムを提供してきました。しかし、それに加え、Grampari のプロジェクトを通して比較的経済的に貧しいバックグラウンドをもつ異なった年齢層と社会層の人々にもメッセージを伝えることができたことでより多面的にインドを見ることができ、多くの刺激を受け、改めて IofC のオープンさと影響力を実感した、そんな１ヶ月となりました。



**会費払込の郵便振替料金は、当協会が負担します！**

昨年 10 月から会員の皆様には、振込料金加入者負担の振込用紙 ( 赤色 ) をお送りし、払込料金をご負担しなくて済むことに致しました。なお、この振込用紙は、会費外の寄付金、各種事業等の参加料金等の振込にもお使いいただけます。

【入会のお願い】

当協会は、皆様からの会費及び寄付金により運営されています。世界の平和につながる青少年の育成や国際交流活動等のため、是非ご入会の上、ご支援ください。

○個人正会員　　会費年額　6,000 円
（議決権を行使できます）
○個人賛助会員　　会費年額　3,000 円以上
○法人賛助会員　　会費年額　50,000 円（一口）

## @編集後記

事務局引き継ぎで、昨年末発行 号が遅れましたこと、誠に申し訳ございません。ここにお詫び申し上げ、2015 年の各企画の報告をお送り申し上げます。長年、国際 IC 日本協会の専務理事・事務局長として、ＩＣ協会の運営と事業推進の要として重責を担われました長野清志専務理事が、来る４月からは 新しい立場で引き続き支援下さる予定です。永年のご尽力に対し心より感謝申し上げます。

（編集委員：中山 啓介、岡本 さくら、長野 清志、兼松 惠、弓場 睦）